

# 教材はどのようにして言葉なしの学習を可能にするのか

教材のアッサンブラージュと重度知的障害・重複障害児の学習の関係

企画者 楠見友輔（立教大学／日本学術振興会特別研究員 PD）  
話題提供者 伊藤 靖（まなび工房／村山特別支援学校自立活動外部指導員）  
松本健太郎（東京都立多摩桜の丘学園／認定 NP0 法人スマイリングホスピタルジャパン）  
楠見友輔（立教大学／日本学術振興会特別研究員 PD）  
KEY WORDS: 教材 重度知的障害・重複障害 アッサンブラージュ

## 【企画趣旨】

本シンポジウムでは、教材の特質と重度知的障害・重複障害（以後、Profound Intellectual and Multiple Disabilities の頭文字をとって PIMD とする）のある子どもの学習の関係についての議論を深めることを目的とする。

日本では古くから、PIMD 児の認知・言語発達の基礎を形成するために、教材の操作を通じた学習と教材の研究がなされてきた（宇佐川, 2007）。PIMD 児の学習において、教材は言葉を用いずに教師が子どもとコミュニケーションを行い、共に学習することを可能にする。教材が言葉なしに PIMD 児とのコミュニケーションを可能にする理由として、それ自身が備える光、音、振動によって子どもの関心を引き出すことや（田中, 2021）、能動的な操作が子どもの伝達意欲を高めること（寺本・川間・進, 2011）が挙げられる。身体接触や教材を通して、教師と子どもは遠藤（2002）が「共振動」と表現するような能動と受動が交叉したような状況に入る。こうして、教師と子どもは言葉なしに経験を共有することが可能となる。

個々の子どもに対して教材を作成し、子どもの反応を見て修正を行う中で、魅力的で分かりやすい教材が創造される。そのような教材は、教師が指示や説明を行わなくても、子どもが自ら学習することを促す。しかし、どのような教材や素材を使えば成功するという単純なリストのようなものを作ることは困難である。類似した教材でも、微妙な素材同士の組み合わせや配置、更に提示の仕方や身体的位置などによって、子どもの反応や学習の成否は大きく異なる。

従って、言葉なしに子どもが学習できる教材は、子どもの特徴や素材の特徴を個々の部分に分解して捉えることは困難である。本シンポジウムでは、教材と大人と子どもの関係を、部分的特徴を有しつつ全体の統一性も有するものとみるために、ドゥルーズ・ガタリ（1980）の「アッサンブラージュ」という概念を用いる。教材と人間をアッサンブラージュと捉えることは、教材と教師と子どもの関係は様々なパーツの特徴の組み合わせから成り立つが、全体性を踏まえずにパーツに分解すると意味をなさなくなると考えることである。

本シンポジウムでは、初めに具体的な教材の特徴や作成過程を説明しながら、実際に教材がどのようにして言葉なしに教師と子どもの学習を可能にするのかについて考察を行う。次に、教材と教師と子どもの関係をアッサンブラージュと捉えることの教育学的、教育実践的意義についての理論的考察を行う。その後、フロアを交えて議論を深める。

## 【話題提供の趣旨】

### 1. 教材がことばとなるための条件を考える

担当：伊藤 靖

「教材はことばの代わりになる」と言われる。しかし、「教材があれば、学習が上手いく」と言い切れないことを、長い教員生活で何度も体験した。同じ教材を使っても、上手いく時と、思ったようにならない時があった。また、

ある子どもにとっては有効であるのに、他の子どもにとっては、有効ではなかったこともあった。その違いはどこにあるのかを何度も考えてきた。これまでの教材を使った子どもとのやり取りから、教材がことばとなる条件を整理してみた。最初に自分の立ち位置（子どもに関わる目的）を説明する。これは、目的と手段を考えるための基準になるからである。次に、教材を使って、上手いかなかった原因（上手いかった時との違い）を 4 つの視点から説明する。

### 2. 魅力的で分かりやすい教材が備えるべき要素や使い方～教材紹介と実践報告を通して～

担当：松本健太郎

PIMD 児は通常環境では学習が停滞する場合が多く、学びを進めるためにはその人の特性や状態に応じた「特別な環境」を用意しなければならない。「特別な環境」を実現するには、困難さに応じて外の世界を教材という分かりやすい形で提示することが必要である。通常、教材作成は個別性が高く、子どもとのやりとりの中で直感的に行われるため、その特徴や工夫を明確に述べるのが困難な場合が多い。しかし、先人たちの知見や子どもたちがやりとりの中で教えてくれるヒントの中には共通項が見出せ、新たな教材作成の足掛かりにできるものがある。今回は、教材紹介や実践報告をしながら、教材が備えるべき要素や使い方について話題提供する。支援者として教材を準備し子どもと試行錯誤を繰り返す喜びについてもフロアと共有したい。

### 3. 言語中心ではない教育の可能性

担当：楠見友輔

アッサンブラージュとは、「あらゆる種類の生き生きとした物の多様な要素のその時限りの集まり」(Bennett, 2010) である。この表現は、物を人間が扱う静的な道具とみなし、道具や言語を有能に用いることを人間の発達と捉える伝統的な教育の前提を変える可能性を有している。アッサンブラージュにおいて、物は人間と対等に影響し合う主体であり、異質な性質が意味に置き換えられずに結びつき、常に変化する。教材を用いた学習はこの例をよく示している。言語活動が重視される現在の教育においては、言語以外でなされている子どもの学習の可能性の多くが見落とされている。言語をモダリティの一つとみなし、言語を用いない学習を中心に教育を見直すことによって、多くの子どもの学習の新しい価値を見いだせるのではないかと考える。

## 【議論の趣旨】

担当：伊藤 靖・松本健太郎・楠見友輔・フロアの参加者

フロアの参加者から、教材づくりや教材を用いた学習の経験を聞きながら議論を深める。教材と子どもと大人の関係をアッサンブラージュと捉え、言葉なしの学習に注目することで、教育の新しい可能性を発見することを目指す。

このシンポジウムは、JSPS 科研費 20J00219 の助成を受けたものです。

(ITO Yasushi, KUSUMI Yusuke, MATSUMOTO Kentaro)